

# ふるさと奥尻通信

平成25年7月30日  
奥尻町教育委員会発行  
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

## 巻頭語

7月はウニ漁のシーズン。観光客も多く、島が活気づく季節。また、震災犠牲者への慰霊の季節でもある。過去をふり返り、未来を創る。経験を生かし、島で生きる。簡単ではないが、やってみたい。

## 特集 震災20年目の奥尻島 被災の島からの幸の島へ

写真:高山 潤

1993年7月12日、午後10時17分に発生した、北海道南西沖地震の被害から、ちょうど20年目を迎えました。この間、島民は筆舌に尽くしがたい体験をしたものの、全国からの励ましと援助により、平穏な日常を取り戻すことができました。改めて御礼申し上げる次第です。

7月12日には、青苗中学校で20年目の慰霊式典が開催され、島内外から400名が参列し、犠牲者の霊を慰めました。節目の年として、マスメディアの注目を集め、数多くの報道陣が取材を行い、情報発信していました。島は一時の喧噪につつまれました。奥尻島津波館では、学芸員の企画展と土田英順さんのチャリティーコンサートが行われ、一般へ無料開放されました。隣接する慰霊碑「時空翔」では、有志による献花とロウソクが灯され、「20 海あれど風こえてふるさとに今」の文字が浮かび上がりました。翌日13、14日は室津神社の室津祭りが行われ、21日には参議院総選挙と忙しい島内となりましたが、恒例のウニ漁とアワビ漁が無事に行われており、観光シーズンの始まりとともに、島の夏が今年も無事にやってきました。



慰霊式典の様子



青苗岬での灯籠流し



全島児童合唱



時空翔と報道陣

島の20年を観光業を中心にふり返り、最近の取り組みについてご紹介します。

1993年、震災直後の混乱と初期対応に始まり、94年～復興計画の策定、建設ラッシュと復興バブルを経て、98年に完全復興宣言とハーフマソンを実施。2001年に震災を後世に伝える奥尻島津波館が開館し、積極的な観光受入に取り組んだことで03年には観光客入込み数震災後最多の58,000人にまで回復しました。05年には初の修学旅行生受入を経験し、奥尻空港の拡張など明るい話題が続き、09年には10年来の悲願だった奥尻産ワインの初出荷がありました。その後、フットパスコース整備、パークゴルフ場のオープンなど観光面での施設開発につとめ、13年からはアクティビティとして、クルージング体験、勾玉づくり体験などを登場させています。体験型・長期滞在観光の確立を目指しながら、漁業では岩ガキの商品化、海産物の流通販路拡大による経済効果が期待されています。また、林業では、間伐材を活かした木製ペレットストーブ、木製品の普及につとめることで、自然を生かしたエコロジーな島をアピールしています。

他に、急増した被災地視察団への対応、研修旅行向けの防災ロールプレーや防災フットパスの開発、12年に結成された津波語り部隊による震災経験の語り継ぎなど、かつての被災地だからこそ提供できる受入体制の拡充につとめています。

こうして、震災後20年目の奥尻島は震災の経験を生かしつつ、天然資源による第一次産業と観光業の二本柱をメインに活動しているのです。



20 海あれど風こえてふるさとに今

### ★奥尻島災害復興関係年表★

1640	駒ヶ岳噴火で大規模降灰
1741	松前大島崩壊で津波被害か
1932	青苗大火
1954	洞爺丸台風高波被害
1963	奥尻大火
1963	奥尻大水害
1983	日本海中部地震津波被害
1983	青苗岬に防潮堤建設
1993	北海道南西沖地震津波被害
1994	復興バブル 97年頃まで
1996	大規模防潮堤完成
1998	奥尻島完全復興宣言
2000	人口地盤「望海橋」完成
2001	奥尻島津波館オープン
2004	台風18号被害

平成5年7月12日(月曜日)午後10時17分、北海道南西沖(北緯42度47分、東経139度12分、深さ34km)を震源とするM7.8の大地震が起き、島は約3分後に最高30mに達する津波に襲われました。北端の稲穂地区、南端の初松前地区、青苗地区をはじめ島内全域で津波被害を受け、同時に発生した土砂崩れ、火災も加わり、死者172名、行方不明者26名、負傷者143名の人的被害を生じました。また、家屋の全壊437棟、半壊88棟など被害棟数1410棟の他、農業、土木、水産など被害総額664億円の大損害を生じ、人口4000人半ばの島は、一夜にして存亡の危機に陥りました。

被害が大きかった理由を挙げると、島が震源に近く、津波の到達が早すぎたこと、島周辺の海底地形が悪影響を及ぼし、津波が高波となり、岬を回り込んで東海岸まで到達したこと、発生が夜間であり、島民の多くが就寝していたことなどが挙げられます。逆に不幸中の幸いであったのは、時期が7月と温かい気候であったこと、島の衝撃的光景がさかんに報道され、全国の善意を受けることができたこと、自助が生まれやすく、人同士の結びつきが強い地域性があったことなどが挙げられます。他にも、震災ボランティア元年と位置づけられるような団体や民間ボランティアの出現、遺跡調査による埋蔵文化財保護の進展と学芸員の採用などがあり、復興事業に伴う新しい街づくりの結果、インフラなどの住環境の整備がなされ、労働場所と住居が分離されたため、衛生面が大きく向上したと評価されています。一方、震災をめぐる報道の在り方、ハコモノの維持管理や、人材育成などの面で課題を残したことが指摘されています。



震災前の稲穂集落



震災後の稲穂集落跡

月刊 奥尻のつり 7月号

前半戦の釣りも残り僅か。すでに磯ではアタリがほとんどありません。浜ではカニ釣りの姿が見られます。それでも、沖の岩の舟渡や、沖まで船釣りに出ればソイ釣りが楽しめます。ソイやハチガラなどの根魚釣りの魅力は、特有の強いアタリと引きにあります。根に潜ろうとする魚との駆け引きが醍醐味です。最初のアタリに合わせて、テンポ良くリールを巻けば苦勞しませんが、少しでも遅れると根に潜り、出てきません。無理に引けば、ラインが切れてしまいます。わざと糸をたるませたり、小刻みにシャクってみたり。魚のこの強い動きは、身をさばくとその秘密がすぐわかります。根魚は背骨が太く、丈夫です。この強い骨格と筋力により、三脚から竿が落ちるほどの、あの激しいアタリと引きを見せるのです。

昭和奥尻生活詩 7回 船帰る

奥尻郡釣石尋常高等小学校一年生「詩集・海に生きる」より

元子濱船光船波太後穂大俺東海東町	気はるの陽かや漁達のの空は未だ	船帰る
良も人も光あ上が旗の空波静ゆまだ静	くはがうると金の何に立船静ゆまだ静	
は岩たつ 道色つ艘波て かにや薄まつ	ねのかく がにそものて にやか暗つて	
て上つて 出光り何上 明か暗つて	あにて 来つ海艘を走 けてにいて	
るある がつ 上つて 来つ	るたから走 来つ	
て	た来る	

渡辺正夫

古津波痕跡調査  
 行った仮ら波こがたい空研  
 とい。説れにと、津港究七  
 。、今をたよに高海波下所月  
 仮年立のり注い岸ののの某日  
 説はてで、目斜に痕沢調  
 を低、は高し面あ跡の査、  
 裏地検な台、かるを斜官北  
 付部証いに過ら丸実面の海  
 けのしか打去出い見に案道  
 と調まとちのて玉して内立  
 と査しい寄大く石ま、で  
 のをうせ津るし古、質



「奥尻未来新聞」完成！！

シンポジウム盛會に  
 すのたま見はかの向一六ム会協  
 る成一し据な、奥け幸〇が共会七  
 予果奥たえに離尻ての名開催の主月  
 定は尻。たか島島一島余催の催二  
 で記未中テ、かはと奥がさ奥、日  
 す録来高しとらど題尻参れ、島本  
 。集新生まい発うしの加、島災  
 と聞らをつ信な、輝し島シ災  
 し」と話たすつ二くま内ン害  
 てと制し得るて〇未し外ポ  
 刊大作合来方い年来たから  
 行会しいを法る後へ。らウ学

新米之記録(編集後記)  
 今号は震災関連特集号としま  
 した。過去の教訓を生かせるか  
 どうかは、現代人の行動次第で  
 す。歴史的にみれば、過去の記  
 憶は失われ、記録は残されにく  
 いものです。その意味で、語り  
 部隊の活動や津波館の役割は非  
 常に重要だと言えましょう。防  
 災・減災意識は、先ずは自分  
 自身のため、末は子孫のために持  
 ち合わせておくべき生存力とな  
 るでしょう。

震災報道新聞各紙有り  
 き報委海ま紙関直た紙育載で  
 る道員洋す様係後。面委記新こ  
 で経会研の々記か他を員事聞の  
 し過の修でな事らに入会を各度  
 よの稲セ、切を約、手で掲紙の震  
 う。分垣ン読み集二九しは載が災  
 析学タみ口成〇三、し特災  
 に芸した取中年年ま可ま集二  
 も員内い材で分地と能し記〇年  
 活ま、方しすの震めなた事、関  
 用で教はて。震発ま限、関  
 で。育、い各災生しり教連係



津波に耐えた記念碑 平成6年頃